
恋するピエロ

青岬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋するピエロ

【Nコード】

N0261J

【作者名】

青岬

【あらすじ】

誰も愛することなく死んだ少女と、誰にも愛されることがなく生きているピエロ。

二人の奇妙な生活と恋愛と情事のお話。

プロローグ

ある所に女の子がいました。

その女の子はまだ赤ちゃんでした。

この世に産み落とされ、空気を幾度か吸ってすぐ、死にました。
名前も付けられず、両親にも抱かれることのないまま、死にました。

女の子は小さく泣きました。

「何故私は誰も愛せなかったのかしら。何も悪いことをしていないのに、何故こんな所に閉じ込められなければいけないのかしら。」

女の子がいた世界から反対側。

そこにはピエロがいました。

もう何年、何十年、何百年生きたか分かりません。

嘘ばかりの、空っぽな生を過ごしていました。

ピエロは大きく叫びました。

「何故私は誰にも愛されないんだ。人のためにたくさん尽くしてきたのに、何故誰も私の願いを受け入れてはくれないんだ。」

正反対の世界にいる、ピエロと少女。

誰も愛することのないまま死んだ者と、誰にも愛されることのないまま生きている者。

出会つことは許されず、出会わないほうが良い二人でした。

ピエロ

誰にも相手にされず、一人で生きているピエロに存在価値はない。その言葉が本当なら、その道化は正に存在価値がなかった。

道化は一人で暮らしていた。

白い壁に、灰色の窓枠と、黒い三角屋根。

屋根には、まるで角のように二つの煙突が立っている。

色の配色を全く凝らないで作ったような家。

それが道化の住家だった。

午後七時に夕食を始め、七時半きっかりに食べ終わる。

二階に上がり、海に浮かぶ月を窓からたつぷり眺めた後、十時半に一階に降りる。

面倒臭くてついさぼった夕食の食器洗いを行い、一息付いたら、棚から適当に本を一冊取り出す。

それを飽きるまでベッドで読んだら、午前零時に明かりを消す。それが日課だった。

ピエロという者は、大抵仮面を付けている。

その道化も例に漏れてはいなかった。

顔全体を覆う、とても変てこりんな白い仮面。

輪郭をなぞるように、耳の辺りまで口角が伸び、両目は三日月が上向きになったよう。

人に笑われるためだけに存在し、自身も人を嘲るように笑っている。

道化のそんなところは、他のピエロと大差なかった。

その道化がピエロらしくないところは、幾つかあった。

一つめは、森の中にそびえ立つ樹木くらい長生きなことだった。

道化は、人の人生を数えきれないほどたくさん眺めてきた。

祝福されて生まれた人。

望まれず生まれた人。

子供や孫たちに囲まれて死んだ人。

一人で孤独に死んだ人。

もう道化は、人の死にも誕生にも慣れっこだった（誰かの誕生日パーティーの真っ最中に、『可哀想に、また一歩死が早まったんだね』と言って叩き出されたこともあった）。

二つめは、ピエロ定番のあの水玉模様のぶかぶかの服を着ていないことだった。

昔はそれを身に纏って、よく芸をしていた。

それなのに、あるとき未練もなく捨ててしまった。

道化は今、全身真っ黒に染められた燕尾服を着ていた。

廃品回収で譲ってもらった品だった。

それは体にぴったりと合い、すぐに道化は気に入った。

燕尾服は、前の服装では隠されていた、道化の本来の体型を忠実に表した。

道化は、針金のように細い体をしていた。

下品な原色だらけの衣装のほうはまだましの、とても滑稽な姿だった。

だが道化は、

「もう腹を破裂させる芸をしなくていい。」

そう言って、嬉しそうに鼻歌を歌った。

道化は長生きしすぎたのかもしれない。

その道化が最もピエロらしくなかったところは、心に欲望と不満を持っていることだった。

自分の生き方に疑問を感じるなど、まるでただの人間ではないかと人は嘲笑った。

草木すら笑った。

浴びせかけられる言葉に納得しながらも、道化はいつも呟いた。

「何故私のことを誰も愛してくれないのだろうか？」

道化は今まで何十年も、人に尽くしてきた。

面白い格好をして、滑稽な行動を繰り返し、やがて飽きて捨てられてきた。

悲しむ間はなかった。

すぐにまた、新しい誰かが拾ってくれたからだ。

「こんな惨めな人生であるだろうか？」

道化と過ごした人は大勢いたが、笑いこそすれ、誰一人道化を愛さなかった。

道化は人間の真似をして、目の辺りをしきりに撫でた（もちろん、これが涙を拭うための動作だとは知らなかった）。

道化は、ひとりぼっちの人のために生きてきた。
同情や愛情を感じたわけではない。

それが道化である者の義務だったからだ。

「私だって愛されたいんだ！」

誰かに、そばにいて欲しい。

誰かに、耳元で囁かれない。

誰かに、口付けをされたい。

偽りで充分だから、ずっとずっと愛されたい。

長い間耐えてきた飢餓を、愛で満腹にしてみたい。

孤独の瓶に、蜜のような愛を注いでもらいたい。

道化の体は、愛への執着と欲望にまみれていった。

既に、誰よりも狂っていた。

また朝がきた。

窓から、真っ赤な朝日が昇って来る。

道化は、ベッドの中で段々と目を覚まし、自分が誰なのか思い出した。

そして、いつも通りの朝に絶望した。

枕元にある、真っ白な目覚まし時計の針が、音を立てながら動いている。

またこれから、単調で新しくも何ともない一日が始まるのだ。

『別人になって起きて、愛する妻が横で静かな寝息をたてていて、枕元の目覚ましは赤くて、窓からは朝日の代わりに真っ白な月が見える……。そんな人生を味わえたら、どんなに幸せだろう……。』

道化は、自分が別人であるわずかな可能性をかけて、シーツの間から少し顔を出した。

部屋の帽子かけには、昨日道化が確かに被ったシルクハットがぶら下がっていた。

道化はとうとう降参し、ベットからはい出て、朝七時に始めることが日課の朝食を作り、一階に降りていった。

ピエロ（後書き）

水曜か木曜更新。

目標、月二回更新。

何話か読み返してみたら、裸足で公衆便所に入って池にはまってその後財布を落としたことに気付いたような気分になったので、ざっと書き直してみました。

書き直してくるうちに何故か新キャラが出てきちゃったっていう意味の分からん事態になりました。

反省も後悔もしている。

墓場

今朝のスクランブルエッグは失敗だった。

昨日のスープを鍋で温めると、昨日と今日で煮込まれ過ぎたキャベツがぐしゃぐしゃになった。

その中に固焼きパンを突っ込み、スプーンでほぐして食べる。グラスに満たされた人参ジュースを最後の一滴まで飲みきって、道化は椅子から立ち上がった。

流しの三角コーナーには、黄色い生ごみが入っていた。

郵便受けを確認しに、外へ出た。

玄関のドアを開けた途端、朝の柔らかな香りと、太陽の光に体を包まれた。

乱暴に突っ込まれていた新聞を、郵便受けから取り出す。

『大量に繁殖していたウシガエル、根絶成功』

そんな記事が、第一面にでかでかと載っていた。

「何か面白い記事はないかな。」

道化は、新聞の端から端まで、全てに目を通し始めた。

だが、『すいかの美味しい冷やし方』とか、『手作り打ち上げ花火の作り方（十歳未満の皆は保護者の方についてもらいましょう）』などという、事件でも事故でもない平凡な記事ばかりで、道化はうなだれた。

「妙齢の女性が、別居中の夫の愛人を刺したとかいう事件があったら面白いんだけどな。」

ページをめくるたび、ふわりふわりと、まだ新しいインクの匂いが香った。

道化は八時に家に戻り、着替えを始めた。

道化はたつぷり一時間使って寝巻きを脱ぐと、燕尾服に身を包み、最後にシルクハットを被った。

仕上げに、銀の懐中時計を胸に入れると、再び外へ出た。少しづつ外が騒がしくなってきた。

道化は、森の中を歩く。

朝の散歩も、道化の日課の一つだった。

木々の隙間から、淡い光がまっすぐ伸び、地面をあちこち照らしていた。

道の途中にポストがあつたので、雑貨屋宛てに手紙を出した（『新製品の人参ジュースは最悪だ』）。

歩いて歩いても、森の中の景色は変わらない。時折風が吹き、上から木の葉がぱらぱらと降り注いだ。

道化の頭上の木に、何か小さい者が降り立った。

目が覚めるような黄色い小鳥だった。

出来そこないのスクランブルエッグを思い出した。

小鳥はぴーちくぱーちくさえずりながら、空に向かって言った。

「道化だ道化だ、道化がやって来た。」

その声が響いた途端、すぐその茂みが音を立てて震えた。

赤い目をした、真っ白い野兎が飛び出してきた。

「ほんとだ、今日も馬鹿面ひっさげてるぞ。」

上からいきなり、くるみほどの小石がぱらぱらと落ちてきた。

道化は驚きながらも、間髪一髪それを全て避けた。

見上げると、木の幹の穴からりすが一匹顔を出していた。

ふわふわの尻尾を振り、尖った前歯をかちかち鳴らしながら言う。

「マジックは出来るかい？ それとも玉乗りのほうが得意なのかな？」

道化は、持っていたステッキを軽く振り上げた。

すると小動物たちはけらけらと笑いながら、何処かに去った。

「あいつらは、よく飽きんな。」

誰かが、口を動かさずに声を出した。

道化の声ではなかった。

道化はため息を付き、シルクハットのつばを掴んでずれを直した。
「しょうがないさ。動物は草や肉を食べて、誰かと交尾すること以外大切なことがないんだもの。そりゃあ、退屈で人をからかいたくもなるだろうさ。」

これが道化の声だった。

道化は、姿も見えない相手に声をかけられたことを驚きもせず、普通に返事をした。

「でもまあ、交尾する相手がいるだけ幸せだ。」

「……………」

きちんと被りすぎたシルクハットの位置を、道化は少しずつらした。
「さて。今日は何処へ行こうかな。」

道化は含み笑いをしながら、顎の辺りをゆっくりと撫でた。

*

大小様々な波の音が、耳に届く。

潮風が頬をかすめ、道化の短い黒髪をなびかせた。

道化は、海沿いの崖に向かって足を進めた。

崖までの小さな丘を登りきると、そこには小さな古い墓場があった。

十字やら真四角やらの石が、そこら中に倒れている。

道化は膝ほどしかない柵を乗り越えて、その墓場に入った。

右膝がちよつと引つ掛かつて転びそうになったが、ステッキを地面に突き刺してどうにかやり過ごした（引つ掛かった柵の部分は綺麗に破壊された）。

今日は晴天のはずなのに、この場所だけは憂鬱としていた。

あちらこちらに苔がはこびっている。

まるで今を冬と勘違いしているような、木の葉一つつけていない枯れ木が五本指をのばしていた。

「なんて、静かな所なんだろう。」

道化は墓場をぐるりと見渡した。

ステッキを手首にひっかけて回す。

まるで楽器をいじるように、ステッキで一つ一つ墓石を打った。

「ジェーン、アレックス、サラ、ハワード、マリー、ジョーイ、ヴ

アルヴァロツサ……。」

崖に落ちないように注意しながら、道化は墓場を一周した。

足元にあつた岩に腰掛ける（それにも名前が彫られているように見えたが、道化は気にしないことにした）。

潮の匂いを鼻いっぱいにかいで、もう一度墓場を見渡した。

「この人たちは、どんな人たちに愛されていたのか、想像出来るかい？」

他人が見たら、完全に独り言を言ってると思われたはずだ。

だが、道化には話しの相手がいた。

「知ったことか。」

それを聞いて、道化は肩をすくめた。

「つまらない答えだなあ。君は、想像力に少し欠けているところがある。」

「もしも、などと考えるのは時間の無駄だ。そんな面倒臭いこと、暇な女だけが考えていればいい。」

「もうちょっと、脳みそを働かせて考えてごらんよ。未来とか、過去のことを想像するって、とっても大事なことだと思うね。地震が起こったとしよう。そこら中はちやめちやにするほどの、大きなものだよ。馬鹿な父親が、ベビーベッドを本棚の近くに置いといたらどうなると思う？ 赤ちゃんは体中に痣を作ることになってしまうし、何より泣きわめく赤ちゃんをなだめる母親が可哀相だ。」

道化の仮面の奥から紡ぎ出される声は、男性にしては少し高めだった。

威厳がなく、空気が抜けた風船のような間抜けな声をしている。対称的に、道化を相手する声は、少し年輩の男性の雰囲気が出た。合唱でいうと、バスに割りふられるような重みがあった。

「知らんな。我輩には妻もおらんし、従って子供もおらん。自分が今そんな状況に立たされているわけでもないのに、もしも……と考えるのはやはり時間の無駄だ。何より、」

相手の声が途切れた。

そんな事実決して認めたくない、とでも言うような沈黙があった後、再び話し出した。

「何より、我輩には脳がない。」

道化は一瞬、とても間抜けな顔をした（はあ？）。

ふと何か小さな疑問に気付いたように、腕組みをする。

その後腹を抱えて笑い始めた。

「そうだった、そうだった。いや、すまない。」

道化はそう言ってシルクハットを脱いだ。

すまないと言っているわりには、ちつとも申し訳なさそうな口調ではなかった。

手の中のシルクハットが細かく震えた。

「貴様、謝る気がないだろう。」

信じられない光景だった。

道化は、シルクハットと会話していた。

シルクハットは拗ねたように黙りこくった。

道化はシルクハットを地面に置くと、ポケットからパイプを取り出した。

刻み煙草を火皿に詰め、マッチで火を点ける。

吸い口をくわえ、煙草をそつとゆっくり味わった。

灰色の煙が空に登り、強く香った。

道化は先程の会話を思い出して、くくくつと笑っていた。

空は青く、高い。

所々に、純白の雲が流れている。

水平線上では、海の青と空の青が釣り合いを壊すことなく調和しあい、混ざっている。

蝉のやかましく鳴く声が、囲むように聞こえてきた。

「……ねえ。」

「何だ？」

道化の声に、シルクハットが答えた。

パイプから深く煙を吸い込みながら、道化は言った。

「この墓石の人たちは、人生で何度セックス出来たと思う？」

ぶふおつ、と誰かが思い切りむせる音がした。

「君でも、むせることがあるんだねえ。」

道化は感心したように、横目でシルクハットを見た。

シルクハットは返事をしながら、体を震わせた。

「墓場で、何を言い出す。」

「気になるじゃないか。だって、セックスって、愛の証の行動なんだろう？」

あっけらかんと道化は答えた。

口から煙を吐き出しながら、光がない目で遠くを見つめる。

「出会って、愛しあって、結婚をして、セックスをして、子供を作

つて……。ああ、何て羨ましいことだろう！」

「……隕石が頭に当たって死んでしまえ。」

「いつそそのほうが楽になるかもね。つまらない。ああつまらない。世界はこんなに美しいのに——。」

シルクハットは、呆れたようにため息を付いた。

また、日課の愚痴が始まった。

毎日毎日、シルクハットは道化の愚痴の聞き役だった。

「なのに何故、私を愛してくれる人はいないのだろう。人を愛すことって、真冬に向日葵を取ってこいって言われるより、ずっとずっと、簡単なことだと思うんだけどなあ。」

「貴様は、下手の考え休むに似たりという言葉を知っているか？」

「知らない。」

「なら、いい。」

シルクハットは、同情と卑下をたつぷり込めた声で言った。

それから小一時間、シルクハットは耳が痛くなるほど、道化の愚痴を聞かされることになった。

『この世界で、貴様を愛す者などいるものか。慈しむ存在などいるものか。』

正直に思ったことを、口にするのはやめておいた。

この道化は案外傷付きやすい心を持っている。

それに、キレたら何をするか分からないからだ。

『正直者が馬鹿を見る』という諺をシルクハットは知っていたし、何より崖から放り出されることは極力遠慮したかった。

肘を立てて、道化はため息を付いた。

「夢の中でもいいんだけどなあ。誰か、運命の人に出会いたいよ。」

「いつそ別の世界から連れてきたらどうだ、ドリーマーくん？」

珍しく、シルクハットが道化に対して返事をした。

道化は笑った。

いい冗談を言ったつもりのシルクハットも笑った。

道化は笑い続けた。

あまりにも大きな口を開けて笑い続けるので、キセルが地面に落ちた。

火皿からぼとりと落ちた灰の塊が、赤々と光った。

だが道化はそれを気にもとめずに、シルクハットに詰め寄った。

「そうか。別の世界になら、私の運命の人がいるかもしれないんだね？」

シルクハットは、自分がどれだけ重要なこと言ったか、気付くまで少し時間がかかった。

自分自身の発言に猛烈に怒ることになるということを、予想出来るはずもなかった。

鏡

道化の日課は、それからすぐに変わることはなかった。

変な知恵を与えてしまった——そう心底後悔していたシルクハットは、この状況を喜んだ。

『そんなことあいつに出来るはずがない……。そうだ、そんなこと許されるはずがない……。』

あの日から、二ヶ月ほど経っていた。

道化は相変わらず、シルクハットに愚痴をたれる生活を続けていた。

午前六時に起きて、零時に寝る。

何もない人生だが、それだけ平和だということだ。

シルクハットは、あの会話のことなどすっかり忘れ、いつもの帽子かけにぶら下がりながらぐっすりと眠っていた。

『やったあああ——！！！！』

一階から響き渡った声で、シルクハットは飛び起きた。

その大きさときたら、天井が吹っ飛んだのかと勘違いさせるほどのものだった。

二本足を持った生き物が階段を跳ね上がってくる音がする。

足がもつれたのか、何回かばたんばたんという音がした。

ドアを蹴り倒しそうな勢いで誰かが寝室に入ってきた。

その人物は紛れもなく、この家の主だった。

「やった！ やったよ！ 遂にやったんだ！！」

「……何を？」

シルクハットは、安眠を邪魔されたことに苛立ちながら道化に訊いた。

今は燕尾服を脱ぎ、白いエプロン姿の道化が大股で帽子かけに近付く。

「ほら！ 見てごらん！！」

シルクハットに向かって興奮気味に、道化は両手を差し出した。道化の両手には、銀色のボウルが掴まれていた。

シルクハットが、その中に入っているものを確かめる。

とりりとした透明な液体と、橙に近い黄色をした球体が二つ。

卵が、銀色の底で波立っていた。

「お前がおそらく料理に使うとしてボウルに落としたこの卵が、我輩の睡眠を妨げた理由をたつぷりと聞かせてもらおうか。」

「ほら、よく見てごらん！ これ、二黄卵だったんだよ！！」

その声に、シルクハットはまたボウルの中を見た。

確かに普通のサイズにしては小さい黄身が二つ、白身の中で浮いていた。

「……で？」

「前失敗してしまったスクランブルエッグを再攻略しようと思ってね、雑貨屋で卵を沢山買ったんだ！ そしたらごらん！ ボウルに最初に一つを割って見たら、何と双子じゃないか！ こんな運のいいことって、中々ない！」

もし自分が人間だったのなら、確実に額に青筋を立てているはずだ。

そうシルクハットは思った。

二黄卵。

細胞という概念から考えて、生物上最大の大きさを持つ卵黄が、一つの卵に二つ入っているものをいう。

二黄卵が孵化することはない。

卵内で二つの胚が発育スペースを奪い合う形となることで、双方とも発育途中で死んでしまうからだ。

鶏が生涯のうち二黄卵を産む確率は一・二パーセントだが、排卵のペースが安定していない若鶏にはよくあることで、別段珍しい現象ではない。

「出ていけ。」

冷たい刀で野菜を切ったように、シルクハットはさらりと会話を打ち切った。

道化は両手を引つ込ませ、シルクハットをまっすぐ見据えた。

「そうはいかない。ここからが話の本題なのだから。」

落ち着いたのか、道化は先程より低い声でシルクハットに囁く。
「ほう。ではさっさとその本題を聞かせてもらおうか。」

シルクハットもそれに応え、道化よりずっと低い声で応戦した。
道化は前髪をかき上げ、不適に笑った。

「明日迎えに行くよ。私の運命の人を。」

シルクハットは、とんかちで頭を殴られたような気持ちになった。

*

「何故いきなり、そんなことを思い立つたんだ。」

「早速実行に移すのは、やっぱり少し気がひけたからね。だから、何か私がびっくりするようなことが起こったら、すぐにやってみようって決めてたんだ。」

翌日の午後七時、道化は夕食を目の前にはいなかった。

夕日が木々の隙間を縫い、ばらばらに割れた橙色の光が道化の体を照らす。

空に浮かぶ丸い太陽は、昨日ボウルに落とされた卵によく似てい

た。

道化はステッキを振り回しながら意気揚々と森の中を歩いていた。こんな時間に散歩したことは久しぶりだ。

日課以外の行動をしている。

それだけで、道化は喜びをひしひしと感じた。

森が静寂へと包まれていく。

道化は木々に寄り掛かり、シルクハットを脱いだ。

シルクハットを胸の辺りで持つ。

そしてその平らな頂上を、まるで埃をはたくように拳で叩いた。

白い革手袋が、黒いシルクハットと対照的だった。

「悪いことは言わん。やめておけ。」

「おや、何故だい？」

シルクハットの中からは、いろんな物が落ちてきた。

フォーク、金貨、ネクタイピン、飴玉、腕時計、ハンカチ、手帳、

羽ペン、それに活きのいい蛙と蛇（最後の二つが出てきたときは、

シルクハット自身が悲鳴を上げた）。

「上手くいきつこないからだ。」

「そんなこと、やってみなきゃ分からないさ。」

振り落とされる手に、加減している様子は全くない。

シルクハットは頭に加えられる痛みに耐えながら、道化と会話した（蛙は蛇の毒牙から必死に逃げようと飛び回っていた）。

シルクハットは深いため息を付いた。

「こんなこと、許されるはずもない。」

道化は、シルクハットの言葉に瞬時に答えた。

「許されないのなら、秘密にしておけばいい。」

「あんな……。」

まるで、悪戯好きの子供が誰かに諷められただけのように、にっこり笑って言う。

まるで改める気はない。

シルクハットは苦虫を噛みつぶした顔——もとい口調になった。

道化が自殺でもするつもりなら、シルクハットは喜んでその行動を応援だろう。

だが、道化の行いで自分に迷惑がかかるのはどうしても避けたかった。

シルクハットの中から、何かが夕日の光を反射しながら落ちてきた。

最後に落ちてきたのは、女性が化粧のときに使うような、小さな手鏡だった。

「これだこれだ、やっと見つけた。」

道化は機嫌良さそうに、地面から鏡を拾い上げた（そのすぐ横の蛇が蛙をゆっくりと飲み込んでいる場面には気にも止めない）。

何の変哲もない、黒い枠で囲まれている丸い手鏡だ。

道化が顔の前でそれを掲げる。

銀色に輝く表面は、橙色の夕日と、道化の白い顔を狂いなく映した。

「自分の顔に見とれる趣味でもあったのか？」

シルクハットの言葉を無視し、彼を頭に戻した。

鏡を手の中でもてあそびながら、道化は自分の頭に向かって話しかける。

「『白雪姫』って童話、君知っているかい？」

「ガラスの靴を落としたやつか？」

「それは『シンデレラ』だね。」

「そういえばシンデレラは元々寒い地域の童話で、靴はガラスじゃなくて毛皮だったそうだよ。」

「え、そうなのかい？」

「翻訳するときガラスと間違ったださうだ。ガラスと毛皮の綴りはよく似ているからな。」

「ほう、それは初耳だ。いや、今はシンデレラの話で盛り上がるわけにはいかないんだよ。重要なのはガラスの靴を履いた少女ではなくて、林檎を食べた少女だ。」

道化は頭を振ってその話題から興味を反らした。

シルクハットが残念そうに口をつくむ。

「ともかく、白雪姫という話の中には、自分が望むものを映してくれる、世にも便利な鏡が出てくるのさ。」

道化は愛おしそうに、鏡の表面を指で撫でた。

鏡が、道化の細長く真っ白な指を映し、きらりと輝いた。

シルクハットは、その鏡をじつくり眺めた。

そして、一拍置いて、素っ頓狂な声を出して驚いた。

「何でもか？」

「そう、何でもだよ。もちろん、遠い遠い所にいる人でもね。」

「何を望むつもりだ？」

道化は、愚問だとばかりに口角を上げた。

「分かりきっているくせに。」

「これが最後だ。やめておけ。」

「おや、じゃあ君が私を止めてごらんよ。」

道化は、笑いながら、両手を鳥のように広げた。

それは、黒い十字架のようだった。

道化がステッキを手から離れた。

木の根の元へ落ち、ステッキが音を出して地面に臥した。

会話がなくなると、森の中の木の葉のざわめきが、ざあざあと耳に入ってきた。

「ほら、今の私には武器も何にもない。止めてごらんよ。拳で横つ面を殴ってごらん。足で鳩尾を蹴ってごらん。さあ、早く。」

風が強く吹いてきたことや、森がどんどん闇に包まれていくこと

に、今までほとんど気付かなかった自分に驚いた。

シルクハットは道化の挑発に乗ることが出来なかった。

あの墓場のときのように、冷静に答えることすら出来なかった。

しばしの沈黙があった後、道化は肩を竦めた。

明らかにシルクハットを嘲る笑みを浮かべ、ステッキを拾い上げる。

「まったく、君はどうしようもないほど無力だね。」

シルクハットは、今ほど両手が欲しいと願ったことはなかった。

両手があれば、この優男の首根っこを力いっぱい握りしめることが出来るのに。

そう思った。

道化はあぐらをかき、木にもたれかかって座り込んだ。

「さて。話を戻そう。この鏡はね、その白雪姫の継母が住んでいる城から昔拝借してきたものなんだ。」

「……拝借？」

「盗んだのではないよ。誰もいなかったから、黙って持ってきただけさ。」

「……………」

「あの時は、ただ面白そうなものがある、と思って持ってきただけだったのだけど……まさか、こんなことに役立つとは思わなかった。」

「

道化は含み笑いをして、鏡を自分の顔の元まで持ってきた。

「さて、あの意地悪女王はどんな呪文で鏡を使っていたかな……。確か、決まり文句はこんな感じだったと思うのだけど。」

声が途中で掠れることがないよう、軽く咳ばらいをした後、よく通る声で道化は鏡に願った。

「鏡よ鏡よ鏡さん。別の世界にいる、生涯誰も愛することがなく死んだ者を映しておくれ。」

しばらく、鏡には何の反応も起きなかった。

道化が手鏡を回しながら、無意味に表面を叩いた。

自信に満ちていた顔が、途端に冷や汗を流し始める。

「違ったかな……まさか壊れていたんじゃない……確かに、一回も磨いてあげたことなんてなかったからなあ……。」

道化が困ったように頭を抱えた。

シルクハットにとって、こんな好都合なことはなかった。

賭けに勝った。

そうだ最初から、何も心配することはなかった。

こんなこと、上手くいきつこなかったんだ。

だが次の瞬間、シルクハットは低くうめき声を上げることになった。

鏡が震え、表面に映っていた道化の顔が歪んだのだ。

道化は、鼻がくつつきそうなほど鏡を顔に近付けた。

道化の白い顔が、化け物のようにぐにやぐにやと曲がってきている。

銀に輝いていた表面が、黒く濁り始めた。

道化の白い顔と鏡の黒い濁りが交じり、激しく渦を巻き始めた。既に道化の顔の面影は全くない。

黒と白は、やがて一つになり、澄んだ灰色になった。

その灰色は、時間が経つにつれ、どんどん透明になっていく。やがて、鏡の中は完全に色を失くした。

そのとき、道化が願ったものは、鏡にはつきりと現れていた。

道化は、鏡の中をじつくりと眺めた。

映っている者に触れられるはずもないのに、鏡に手を伸ばす。喜びを噛み締めながら、道化は鏡を胸にしまった。

「待っていて。私の、未来の花嫁さん。」

道化は立ち上がり、森の奥にへと足を進めた。

「何処へ行くつもりだ？」

シルクハットの問いに、道化は手短に答えた。

「『魔女』の所さ。」

「お前は、あの女が嫌いではなかったのか？」

「ああ、嫌いさ。殺してやりたいほどね。でも、今回ばかりはあれの力を借りないと、どうしようも出来ない。」

道化が立ち去った木の元、蛇はやっと、蛙の足を全て飲み終えた所だった。

鏡（後書き）

しつくりくる話の数え方が思い付きません。
『。球目』とか『。ページ目』みたいな。
もうシンプルイズベストの精神で『。話目』にしようかな。
とりあえず今は保留ということ。

二黄卵参考…… Wiki

シンデレラ参考…… 漫画『パタリロ！』

魂

「そんなこと、出来ない。」

天井にある濃橙のランプが、部屋を照らしている。

橙という定義では同じであるのに、夕日と違い、人工物のランプは美しく光らない。

道化は、おそらく来客用であるのだろうソファに座り、腕を組んでいた。

白く柔らかいソファが、道化の体重で深く沈んでいる。

机には、紅茶が入ったカップと、白い皿に並べられたクッキーが用意されていた。

道化は目の前の人物の瞳を見ながら、もう一度言った。

「そんなこと、出来ない。」

「おや、無理なのかい？」

魔女は、片手にマグカップを持ち、その中のホットミルクを啜りながら言った。

机にある砂糖壺の蓋を開けると、一掴み中身をすくった。

それをマグカップの中に入れ、銀のスプーンで中を掻き回し、また口を付ける。

魔女は、客である道化に目をやった。

くすくすと楽しむように笑い、道化の仮面の顔を眺める。

「似合っているねえ、それ。」

道化は、その言葉に何も答えなかった。

先程までの会話を続ける。

「何か、別の方法はないのか。」

「ないよ。こればかりは、私にはどうにも出来ない。紅茶もう一杯いかが？」

道化は、軽く手を上げてそれを断った。

苛立ちを隠さず、ステッキで軽く床を叩いた。

「貴方は魔女だろう。」

「そう人は言うね。」

「何か別のやり方は見つけれないのか。」

「無理だねえ。お茶菓子はいかが？」

魔女は、こんがりと焼かれたクッキーを奨める。

甘い香りが漂い、可愛らしく星型やらハート型にくり抜かれ、とても美味しそうだ。

道化は再び、手を上げてそれを断った。

「その方法でしか、無理なんだな。」

魔女は、道化が手に取ることのなかったクッキーを自分の元へ寄せる。

魔女がそれを一口に入れると、さくつという小気味いい音がした。

魔女は頬を動かしながら、じっくり自分お手製の菓子を味わった。喉を動かし、口の中のものを飲み込むと、また道化と話し始めた。

「ええ。だって、彼女は、そこにいるんだもの。」

「……そうか。」

道化は、ソファから立ち上がった。

上の重みがなくなったソファが、ゆっくりと膨らみを取り戻す。横に置いていたシルクハットを被り、道化はドアに向かった。

「あら、もうお帰り？」

「邪魔をした。」

魔女が、首を傾げて訊ねた。

道化は魔女の顔を見ないまま、足を進める。

「お土産に、林檎でもいいかが？」

魔女はマグカップを机に置き、椅子から立ち上がった。

すぐ近くにある戸棚の元まで歩いていき、観音開きのドアを開け

る。

すると、そこには林檎が沢山入った籠が中に納められていた。深紅の皮が照明の光に照らされ、なめらかな輝きを描いている。

道化は振り返った。

道化は、この家に来て初めて笑っていた。

「やめてくれ。友人と、白雪姫の話をしたばかりなんだ。」

道化は魔女の家を出た後、あの墓場へと向かった。

相変わらず波の音は衰えず、崖の下では白い水しぶきが飛び散っている。

道化は、胸元から小瓶を取り出した。

あの魔女から貰ったものだった。

いか墨のように真っ黒な液体に満たされており、道化の片手にすっぽりと収まってしまふほど小さい。

開け口の所には紙の札が付いており、真っ赤な文字で『Don't drink!』（飲むな）と書いてあった。

「……ご丁寧に、髑髏マークまで描かれているよ。」

道化はちよつと躊躇いを見せながら、瓶のコルクを抜いた。腐った卵のような匂いがする。

道化は瓶を口元まで持ってきた。

そして瓶を傾け、中の液体を一気に飲んだ。

前に失敗したスクランブルエッグとそっくりな味がした。

すぐにも吹き出したかったが、努力して体の中へと押し込んだ。

「流石に、赤ワインと同じ味ではないか。」

道化は苦い顔をして、空になった瓶を見つめた。

そして、道化は、地面を力強く蹴った。

道化は、海へ飛び込んだ。

*

ここは、道化がいる世界ではなかった。

喋るシルクハットも、魔法の鏡も、魔女も存在しない世界だった。赤ん坊は自分でおむつを代えられないし、犬や猫は二本足で立つてもないし、太陽が昇るのは東と決まっている。そんな世界だった。

そこで暮らしている、ある者がいた。

その者は、人間だった。

その人間は、この世界の常識から考えて、特におかしいところを持つていたわけではなかった。

特徴をあえて上げるとすれば、その者は既に死んでいることだった。

この世に生を受けて間もなく、赤ん坊のまま亡くなった。

魂は、天国に登ることも、地獄に堕ちることもなかった。

天国に行けるほど善行はしていなかったし、地獄に堕ちるほどの悪行もしなかったからだ。

その者が生きている間したことといえば、ただ涙を流し、喉から声を張り上げただけ。

その者の魂は、何年も、深い海の底に繋ぎとめられることになった。

逃げようとしても、海がそれを許そうとしなかった。

魂は、泣きわめいて誰かにその存在を伝えようとしたが、自分に

は喉がないことにすぐ気が付いた。

魂は、冷たい水の中で、光を放ちながら漂うことぐらいしか出来なかった。

魂は海の底で、水の中に溶けこんできた言葉をよく聞いた。

その言葉は、立派な肉体を持ち、人生を楽しんで生きている人たちのものだった。

『今日のご飯は何にしようか。』

『あいにくの雨だ。』

『チヨコレートの誘惑に負けない人っていると思う？』

『来週姪っ子の誕生日だね。』

『走ると転んでしまうよ。』

魂は最初は人間の言葉を聞くのを酷く嫌がった。

何とか耳を塞ごうとしたが、塞ぐ耳がないことをすぐ思い出した。

魂はそれでも、意地になって降り注ぐ言葉を無視し続けた。

『見てごらん、カモメが飛んでいるよ。』

『人魚姫は七色の泡となって消えたのさ。』

『海の近くの街に生まれて、本当に良かった。』

意地は、やがて疲れと悲しみに変わり果てた。

魂は少しずつ、人の言葉に興味を向け始めた。

『人生を楽しむために必要なのは、苦い珈琲とまろやかな牛乳だ。』

面白い言葉だと思った。

それと同時に、難しい言葉だと。

魂は、理解しようとしばらく考え続けた。

だが、やはり難しくてやめた。

『嘘つき！ 嘘つき！ 嘘つき！』

強い怒りの言葉を聞いて、魂はぶるりと震えた。

嘘つき。

相手は、誰のために、どんな嘘をついたのか。

自分のためか、それとも他人のためか。

魂は、その嘘で誰が守られたか想像した。
中々楽しめた。

『お月様、どうか私の願いを叶えて下さい。』
願いごとは、流れ星だけに願うものだと思っていた魂は、これを聞いて驚いた。

月に願う人もいるのだと。

一瞬で消え去ってしまう、小さな光。

そんなものより、一晚中空の上でどっしり構えている月に願うほうが、確かに叶いやすいかもしれない。

魂は一人で納得し、笑った。

魂は、人の言葉を聞くのが好きになっていた。

ある日、魂は今までで一番興味深い言葉を聞いた。

『世界で一番、愛してるよ。』

とても幸福そうな、とても楽しそうな言葉だった。
愛してる。

好きよりも、大好きよりも価値のある言葉。

へえ、と感心した。

愛してるという言葉は、今まで言われた側が嬉しく感じるものだ
と思っていた。

だが、言う側も嬉しいものなのだと、初めて知った。

魂は、いつのまにか愛してるという言葉が好きになった。

いつか誰に言ってみたい。

そして、幸福な気持ちになってみたいと。

魂は、深く悩んだ。

何故自分がこんな所に閉じ込められているのか、ということと殆ど同じくらい悩んだ。

喉がなければ、声を出せない。

もし声を出すことが出来ても、言う相手が見つからない。

魚や貝に呟いたとしても、答えてもらえない。

魂は、この悩みに心を捕われることになった。

魂は、月に願っていた人間のことを思い出した。

海面を見る。

波の流れで、月が揺れて見えた。

黒い夜空に浮かぶ白い光が、まっすぐ歪むことなく海を照らしている。

魂は、月をじっと見据えた。

胸もないのに、熱い何かを感じた。

『いつか――』

月は、何も答えずに、ただ海面に浮かんでいるだけだった。

だが、魂は確かに満足感を感じていた。

突然、体が締め付けられる感覚がした。

まるで、誰かに、二つに引き裂かれているように痛む。

魂は、今まで味わったことのない苦しみに、ただ戸惑った。

そのせいで、誰かの腕が自分の後ろに伸びていることに全く気付かなかった。

黒い両手が、魂を捕まえた。

魂は、硬直しながらも、相手の姿をしっかりと見た。

体はない。

ただ、黒い袖を纏い、白い革手袋をはめた両手だけが、そこにあった。

まるで、腕以外透明人間がいるようだ。

魂は、『貴方は何？』と訊いたらいいのか、『貴方は誰？』と訊いたらいいのか分からなかった。

少なくとも天使ではないと思った。

天使は黒い服を着たりしないだろうし、何よりこんな登場のしかたをするとは思えない。

では、悪魔だろうか。

悪魔は、獲物を捕まえられたことを喜ぶかのように、腕を激しく振った。

そのせいで、魂はとことん目を回すはめになった。

揺れる視界が気持ち悪い。

水の青が、どんどん真っ黒になっているのは気のせいか。

悪魔は、魂を愛おしげにゆっくりと撫で、言った。

『迎えに来たよ。』

魂は抵抗出来なかった。

苦痛のせいで、動く気力はなかった。

その痛みは、何故かどんどん眠気を促した。

悪魔の両手が、魂を優しく包んだ。

魂には、悪魔の手の中で、月も、水も、海藻すら見えなくなった。

魂は、海の中で初めて、深い眠りに落ちた。

林檎

湿った空気が鼻をつく。

濃い曇天が、空に広がっていた。

白と黒の絵の具を、一対一で混ぜ合わせたような暗い空。

大地には、緑の海が、風に忠実に従ってなびいていた。

背が高く、細長い木々たちが森を形成している。

その森の中心に一本だけ、他のものと比べて一回り小さい木があった。

小さいといっても、人の背を由に超す大きさだ。

生き生きとした緑の葉の中に、鮮やかに光る赤色の実がなっている。

そして、木の麓。

地面から宙に向かってでこぼこに伸びる、太い根を枕にして目を閉じている少女がいた。

まだ成長段階にある体には、衣服を何一つ着ていない。

肩までの長さの、木の幹のような茶色の髪が顔にかかっている。

少女が、目を覚ました。

まばたきを数回した後、ごろりと寝転がって、体の向きを変えた。手で隠すことなく大きな欠伸をすると、身に纏わりつくけだるさをどうにか振り払い、上半身を起こした。

歳は低く見積もって十四、高く見積もって十七といったところだろうか。

欠伸のせいで涙に濡れた両眼は、新緑のように爽やかな緑色をしている。

少女の二つの目が、周りに広がる風景を捉えた。

花を咲かせながらそよぐ草原、寄り添って生えている樹木、そして自分が背を預けている木。

灰色の空を見上げると、固まっていた首の骨が音を立てた。

「……………」

頭を下げ、もう一つ大きな欠伸をする。

少女が、ふと目の前に手の平を差し出し、感触を確かめるようにゆつくりと握り締めた。

筋肉の収縮が、拳から腕に伝わる。

次に、片膝を立て、関節に力を込めた。

その力をばねに、もう片方の足を持ち上げ、立ち上がる。

よろよろとふらついて、まるで生まれたての仔馬のように情けない。

「あ」

体が後ろに傾き、中々派手に後頭部を幹に衝突させた。

「いつ！」

思わず後頭部を両手でかばう。

ぶつかる前にこの行動が出来れば痛みを和らげられたのに、と少し悔やむ。

ひりつきのせいで、目に薄く水が張った。

痛みがじょじょに消え、やがて気にならなくなった後、少女は自分がここに存在していることの異常さに気が付いた。

——「ここは何処だ？」

少女は、海の底に沈んでいたはずだった。

酸素がない水中にいた。

喉がない体で呼吸していた。

それなのに、今は地をしっかりと踏みしめ、空気が喉を通って胸を膨らませている。

何故？

少女は、今とても奇妙な体験をしていることになる。

何故なら少女は、生きてはいなかったのだから。

彼女はそのことを忘れるほど、傲慢ではない。

それなのに、こんな立派な体を思うがままに操れている。

少女は眉間に皺を寄せ、首を傾げた。

「……ああ！」

合点がいった証の声を外に出した。

ほんと手の平を叩く。

これは、夢なのだ。

頭がぼうつとする。

先程まで熟睡していた感覚が、体に残っていた。

だが、今も覚醒はしているわけではないだろう。

そう、現在体験していることも全て、現実ではない。

海の底で、眠ったことは覚えている。

頭の中の願望が、睡眠中に夢となって現れただけだ。

「ふむ。」

成る程幻の中でなら、体を持ち、水の中からはい上がることもたわいない。

少女は木の下で、固まった体をほぐすため大きく伸びをした。

「夢の中を過ごすのは初めてだけど、」
悪くない。

少女はこの夢を、精一杯楽しむことに決めた。

*

少女は、木になっていた果実を努力して、（具体的に言うと、奮闘しながら木に登って枝に手を伸ばし、その過程で頭に数個たんこぶを作って）何とか一つ、もぎ取った。

少女は、自分のものとなった果実をまじまじと見つめる。
たわわという言葉がよく似合う、大きな実だった。

片手だけでは余りに頼りなかったので、もう片方の手をその輪郭に添える。

赤く歪みない丸い姿が何とも美しい。

球体型の鏡のように、少女をうつすらと皮に写していた。

少女の緑の目さえも（もちろんその小さな世界だけの話だ）赤に染まることを余儀なくさせられた。

つるんとした表面を親指の腹で撫でると、冷たい内部の温度が伝わってくる。

味も素晴らしかった。

少女には、口に溶けかけの氷が滑り落ちたように思えた。

香りよく、適度に冷たい。

まるで、体全てが舌になったように喜ぶ。

丸い果実がすっかりやせ細ってしまった頃、少女は自分の体に何一つ纏ってないことをやっと気にしだした。

頬に朱色をさしながら、ほんの少し膨らんでいる胸を両手で隠す。誰もいるわけではないが、浴室以外でこんな格好をしているのは、たとえ夢の中でもどうも恥ずかしい。

誰にも見られることがないのが唯一の救いである。

腹は満たせたが、さてこれからどうするか。

少女はため息を付いて、頭を垂れた。

「こんにちは、お嬢さん。」

その声に勢いよく頭が上がる。

茶色の髪が軽く揺れた。

いつのまにか、少女の前に男が立っていた。

足音も、気配も何も感じさせないままに。

目の前の人物が、挨拶代わりに少女に礼をした。

針金のように細い長身を黒い燕尾服に包み、頭の上に黒いシルクハットを乗せている。

右手には、シルクハットと燕尾服と同じように黒いステッキ。

黒い革靴が、黄緑色の床を踏みしめていた。

二人の間の時が止まる。

少女の顔が一瞬で沸騰したように赤くなった。

頭で考えるよりも先に足が動き、後ろの木の陰に素早く隠れた。

「お嬢さん？」

幹ごしに、男性としては高めの声が聞こえた。

風船の空気が抜けたような、間抜けな声だった。

少女は壁になってくれている木に寄りかかり、しゃがみ込む。

何故こんな森で、自然の中には不釣合いな、真っ黒な服を着た男が現れるのか、皆目検討がつかない。

といっても、自身も釣合いが取れている格好ではないことは、重々理解している。

「お嬢さん。」

草が踏みしめられる音がした。

その音は規則正しく、どんどん大きくなってくる。

少女の肩が一瞬震え、足は怖気づく。

「いや！！！！」

少女が羞恥と恐怖で目を固く閉じながら、叫んだ。

同時に、もうほとんど芯かない手の中の果実を男に向かって投げた。

すーんと濁りない音が聞こえたということは、見事命中したらしい。

閉じられたオルゴールが音を奏でなくなるように、ピタッと足音が聞こえなくなった。

裸の少女に遠慮なく近づいてくる行動を見る限り、男は他人とは少し違う思考をしているようだ。

だが流石に少女のこの行為を、歓迎とは思わなかったらしい。

男は忠実に、そこで立ち止まった。

「私が嫌い？」

また、風船の空気が抜けたような間抜けな声がした。
会ったばかりの人物に、嫌いも糞もあるだろうか。

少女は返事をしなかった。

「嫌いと言われるのは悲しいなあ。」

間抜けな声が、雀の涙ほど憂いを帯びた。

「嫌いとか、嫌だとか、そういう言葉は……、うん、君からだけは言われると悲しい。」

また、草が規則正しく踏みしめられる音が再開した。

少女は目を瞑り、身を強張らせる。

音は、やがて止まった。

だが、いくら経っても何も少女の体には触れてこない。

少女は震えながらゆっくりと目を開けた。

「逃げないで。」

決して体をはみ出さないようにして、幹の横から男が手を伸ばしている。

「君が嫌がることは、絶対にしないから。」

その手には、燕尾服の上着が垂れ下がっていた。

あまり時間を置かずに、木陰から少女は出てきた。

淡い色の肌には、黒く分厚い上着を纏って。

男の上着の端は、少女の太股の中段まで届いていた。

その持ち主の男は、先程までの少女を真似するように、幹に背中を預けて空を見上げている。

「雨が降ってきそうだね。」

男が不快そうに言った。

少女が相槌を打つことはなかった。

無言で、男の横に自分も幹に背中をもたれかける。

少し肌寒くなってきたこの気温の中では、男が貸してくれた上着は有り難かった。

燕背服の最大の特徴である、割れた背中が尻をさらけ出してないか頻りに気になることを除いては。

深い沈黙。

空の黒い雲はどんどん濃度を変えている。

少女は隣に存在する人物の顔を、右斜め下からまじまじと見つめた。

彼の顔は、至極奇っ怪だった。

とても変てこりんな、白い仮面を付けている。

輪郭をなぞるように、耳の辺りまで口角が伸び、両目は三日月が上向きになったよう。

まるで、誰かを嘲っているような笑み。

二度も伝えるのはくどいようだが、やはり至極奇っ怪な顔だ。まるで道化を演じているように見える。

その癖、あの下品な原色だらけでぶかぶかの水玉の服を着ていない。

逆にそのことが、男を何となく滑稽に見せた。

「あ——」

この沈黙を断ち切ろうと、少女が口を開いた。

それに反応した音は、男の口から発せられたものではなかった。柔らかい草の上に、何かが着地したような軽い音がした。

少女と男が、首を回して音の方向に目を見張る。赤い実だ。

二人から少し離れた、草の上。

形成したときは皺一つなくぴんと張っていただろう赤い皮は、べろりと垂れ下がって、黄ばんだ中身を醜く曝している。

所々どす黒く染まった、変わり果てた姿。

少女が首を上げる。

熟し過ぎた実が、強制的に木から別れを告げられたのだろう。

「勢力をそのまま閉じ込めたような、そんな色をした実も、やがて朽ち果て、醜くなる。全く不思議なことだね。」

男が、少女の顔を覗き込んで言った。

その顔の近さといったら、鼻と鼻が触れてもおかしくない距離だった。

「お腹は空いていない？ 林檎でもどうかな。」

即座に少女に後ずさりされたことを気にする様子もなく、男は白い手袋に包まれた指を伸ばして、頭上を指した。

もう腹は十分膨れていた少女は、首を横に振る。

「それは残念。では、私だけでも頂こう。」

男が、黒いステッキを反対に持つ。

先端を、緑の固まりに突っ込み、乱暴に掻き回した。

やがて、赤い実は一つ落ちてきた。

男のシルクハットに当たり、跳ねたそれは男の手を最終的な着地点とした。

「ごめんよ。」

男が誰に言うともなく、呟いた。

彼のシルクハットが軽く震えているのは気のせいだろうか。

男が口の前に実を差し出し、かぶり付いた。

きちんとした身なりに似合わない、中々豪快な食べ方だ。

しゃりしゃりと実がすり潰されている音がする限り、歯はちゃんとあるようである。

「木の下に、男と女と林檎。いいね、まるでアダムとイヴのようだ。」

少女は男が言ったその言葉に、肩をすくめただけだった。

瞬く間に、果実は芯を残すだけになった。

それを地面にぽいと投げ出し、男は改めて少女に一礼をした。

慌てて少女も礼を返す。

「初めまして、お嬢さん。」

「えっと、初めまして、お兄さん。」

「おじさんと答えてくれなかったのが嬉しいね。」

男は頭を上げると、自分の上着で包まれている少女の体を首からつま先まで眺めた。

「男として素直に言つと、その格好の方が好ましいのだけれど。紳士としては、君をいつまでもその淫らな姿のままで過ごさせる訳にはいかないな。」

男が腕を組んで悩ましく言った。

それを聞いた途端、少女は驚きで両目を開いた。

「協力してくれるの？」

男が頷く。

「この格好を、少しでも改善することに。」

男がまた頷く。

ぽかんと口を開けた少女に、男は笑って答えた。

「もちろん。」

「そう……。」

少女はこの男の気質を、改めて考えさせられることになった。
第一印象としては最悪だ。

だが思ったほど、悪人ではないということだろうか。

「さて、服を手に入れるには服屋だね。早く行こう。あまりいい天気ではない。」

男が空を眺める。

太股の間を掠めていく風が、湿り気を帯びていた。

少女は、胸の辺りの生地を軽く撫でた。

男について行った方が、お互い有意義であることは目に見えている。

だが、信用していいのかはまだ判断が付かない。

この男のことは、まだ分からないことばかりなのだ。

だが今は――

少女は、決意を固めた。

「――ええ。そうしましょう。」

男が笑い、少女が微笑む。

少女は、男が伸ばした手を取った。

体温が、まるでない手だった。

林檎（後書き）

くような・くように

この二つをあまりにも多用しているような気がする。
あ、また使ってしまった。

雑貨屋

腹を空かしているように、空からごろごろと音がした。

風が強くなり、木の葉はかさかさとして身を寄せ合う。

そんな森の中を、足早に移動していく二つの影。

少女を連れた男は、革靴を光らせながら大股で目的地に急いでいた。

ちらちらと天空を確認しながら、威勢よく草むらを踏み締める。

歩幅の差に到底ついていけないだろうと思われた少女だが、当の本人は男に肩車されて移動していた（地面を裸足で歩くつもりかい！？ 針山に行く方がまだましだ！）。

胸から伸びる剥き出しの足が、男の胸の前でぶらぶらと揺れた。

頭上の風景が目まぐるしく変わっていく。

振り落とされないようにしっかりと相手の頭を掴まなければいけなかったのだ、男の肩の上はお世辞にも乗り心地がいいとは言えなかった。

早足に比例して、かなりの振動が肩に伝わってくる。

シルクハットが、気のせいかもしれないが何故か反抗するかのようにはぶるぶると震えており、腕と胸がどうもくすぐったかった。

胸に張り付いてきた吐き気をどうにか紛らわそうと、少女は男に話しかけた。

「……服屋って、この森の中にあるの？」

話しかけられた男が頭を上げたので、危うく体を地面に叩き付けられるところだった。

「ああそうさ。森の端っこで、兄弟で経営している。」

「兄弟？」

少女が頭を横に傾ける。

男は、変な連中さ、と発言した後、

「曜日ごとに、服以外にも色々売られているから行ってみるといい。あそこでは、大抵のものが手に入る。」

と言った。

よく貴方が他人に向かって『変』という単語を使えるな。

そんな言葉を飲み込み、へえ、と相槌を打った。

その店主たちの性格はともかく、品質的・品揃え的には特に問題はないらしい。

「ああそれと、」

「何？」

「いや、君の格好なら大丈夫か。」

何が、と聞く前に膝頭を男に撫でられた。

背中に冷えた舌が這った感触がして、少女は口をつぐんだ。

*

煙突から、くすんだ灰色の煙が立ち上る。

その煙は宙を蛇のようにはい回り、消えた。

「さあ、着いたよ。」

男の肩の上でそろそろ限界を感じていた少女だったが、その言葉で食い入るように前方を見た。

とても大きな建物だった。

煙を絶え間無く排出している焦げ茶色の煙突、むらなく真っ赤に塗られた三角屋根に、淡い檸檬色の壁。

森の開けた所にある巨大な店は、自然色に溢れたこの場所では一際目立つ代物だった。

男がその店のドアまで足を進め（こんなに大きな建物なのに、ドアは一つしかなかった）、膝を曲げた。

「何も踏まないように、気を付けるんだよ。」

男はゆっくりと少女の足を地面に付けた。

やっと視界の高度が元に戻った少女は、振動しない地面の愛らしさを噛み締めた。

目の前にそびえ立つ店を仰ぎ見る。

清潔感をアピールするような純白のドアには、黒い文字でこう書いてあった。

『雑貨屋 カーシャ & amp; フツチ』

そのすぐ下には、真っ赤なインクでこう書いてある。

『返品ツケ固くお断り』

男が少女の襟首を掴み、素早く後ろに引き寄せた。

少女の鼻先を、白色の物体が掠った。

いきなりドアが開いたのだ。

ドアを開いた者の背丈はとても小さい。

少女は最初、子供がお使いにでも来ていたのだらうと思った。

驚き混じりになりながらその姿を見つめ、それに釘付けになる。

その小さな影は、子供ではなかった。
人間ですらなかった。

そこにいたのは、二足歩行している狸だった。
可愛らしいピンク色のエプロンを腰に羽織って、片手に籠をぶら下げている。

「まあまあ、ごめんなさい。」

二人の邪魔になってしまったことを謝るその声は、どう聞いても人間の女性の声だった。

目の前の人物の姿を、くりくりとした二つのどんぐり目が捕らえた。

可愛らしく首を傾げ、その狸は言った。

「あらあら、初めて見る人。こんにちは。」

少女の口は、接着したように動かない。

そんな様子を見て、狸は目を細めて微笑んだ（少なくとも少女にはそう見えた）。

「ふふ、またね。ごきげんよう。」

貴婦人がドレスの両端を広げて挨拶するようにエプロンの両端をちよいと広げ、狸は二人の横を通り過ぎて行った。

店から離れ、楽しそうに尻尾をぱたぱた振りながら、上機嫌そうに森の奥深くへと帰って行く。

軽いメロディーと歌詞が、耳に届いた。

狸は歌っていた。

人生をとても幸福そうに過ごしてそうな声で。

そしてやはり、人間の女性の声で。

チャリリンチャリン 胸の中

恋は音出しやってくる

チャリリンチャリン 口の中
赤い飴玉濡れ滑る

チャリリンチャリン 家の中
屋根は日に惚れ真っ赤っ赤

チャリリンチャリン 鍋の中
赤いトマトが煮えている

チャリリンチャリン 森の中
苺は既に甘い味

チャリリンチャリン 水の中
蛙は赤と正反對

チャリリンチャリン 本の中
姫は魔王と大恋愛
勇者のことなど何処吹く風よ

チャリリンチャリン、チャリリンリン
恋は音出しやってくる

狸の茶色い後ろ姿は、森の緑にすっかり隠された。
さくさくさくという小さな足音も、やがて聞こえなくなった。
「入ろう。」

男が少女の背中を優しく押し、店の中へと促す。

少女は狸が去った道をずっと見ていた。
歌の歌詞が、どうにも頭から離れなかった。

*

ドアの向こうは、商品で溢れていた。

果汁をふんだんに使った虹色棒付きキャンディー。

皆同じ顔をした人形。

表面が鏡代わりにもなりそうなほど磨き上げられた大鍋。

『危険！ 軍手をして取り扱うこと』と注意書きがされた、何が
入っているかは不明な箱（鎖が何重も巻き付けられ、 がたがたと
震えていた）。

そんな物達がそれぞれ天井にでも達するかというほど高く積み上
げられている。

そのおかげで、店の空間は外から見たときほど広くは見えなかつ
た。

ついでに店内の温度は、窒息しそうなほど暑かった。

熱気が体に纏わり付く。

壁にある黒く巨大な暖炉では、火の固まりの中で何十本もの太い
薪が火の粉を飛ばしていた。

早くも顎に滴る汗を拭う。

ここの店では絶対に氷を売ることは出来ないだろう、と少女は思った。

「今は冬なの？ 外にいても、そんなに寒くはなかったのだけれど。」

「あの兄弟は、寒がりだね。」

少女は肺に供給される酸素が極端に少なくなったことに苦しんでいるというのに、男は全く変わった様子もなく涼しい顔をしていた。「いらつしゃいませ——！！！」

いきなり後方から、元気を十分に有り余らせたようなはつらつな声がした。

その後すぐ、痛みを訴える声と（んぎゃっ！）、何か積み重なっていた物が激しく崩れ落ちる音がした。

後ろを振り向くと、赤青緑、高く積み上げられていたであろう何十冊もの本が全て、床にぶちまけられていた。

そしてその下には、何か黒く丸っこい物体がばたと暴れている。

その物体が何なのかは、まだ判別が付かない（先程のいらつしゃいませという言葉からして、この店の店員であることぐらいは分かる）。

人間でないのは確かだ。

黒く丸っこい物体が悲鳴を上げる。

「助けて下さーい！！！」

「面倒だ、放っておこう。」

「そんな訳にもいかないでしょう。」

服を売られる前に、圧死してもらっては困る。

少女は男の言葉を無視し、色とりどりの山に近付いて何冊もの本を掻き分けた。

本の分厚さや大きさは様々で、辞書から絵本までたくさんあった。「本は傷付きやすいからどうか慎重に…… ああっ床に投げないで！」

ああそれは著者のサイン入りなんですよ！」

本の隙間からくぐもった声がした。

黒い者は自分の体の安否より、本の扱われ方を心配している。

少女はその声を適当に聞き流しながら、『アーサー・マホットの
簡単園芸』という、ことさら重い一冊をどうにかどけて、やっと黒
い者を助け出した。

助け出されたそれは、額を拭いながら少女の腕の中で一息付いて
いた。

「ああ、重かった。いやー助かりました、有り難うございます。」

その者の体は、ぬいぐるみほどの大きさだった。

暖かく、ぽよぽよと柔らかい。

真っ黒な体。

へらのような翼に、黄色い嘴、突っ張った腹。

おそらく首元にあたる部分に、真っ白なマフラーを巻いている。

少女の両手には、ペンギンがいた。

全身が煤のように真っ黒な。

店員の両脇をしっかりと掴みながら、少女は訊いた。

「貴方……。」

「はい。」

「カラス？」

その者はかなりショックを受けたようだ。

一瞬間が呆気にとられたように無表情になり、その後目を吊り
上げて喚き立てた。

「何たる侮辱！ 何たる屈辱！ カラスなどと！ ひどい！ ひど
い！」

カラスモドキは両羽で、ぺちぺち音を立てながら、自分を抱き抱
えている腕を叩く。

少女はカラスモドキを床へ落としてやろうかと思っただが、流石にそれは可哀相なのでやめた（それに、その攻撃は全く痛くなかった）。
床にゆっくりと下ろされたカラスモドキは、嘴でつんつんと少女の足を突いた。

少女はしかめっ面をして、後ろの男に訊ねた。

「私、何か変なことを言っただかしら。」

「カラス、と言ったのがまずかったのではないかい？」

「でも、黒い鳥と言ったらカラスでしょう？」

足元に視線を移す。

カラスモドキは肩を怒らせて抗議した。

「ひどいひどいひどい！ 僕はカラスじゃない！ あんな、ずる賢つこくて卑怯で陰湿でゴミ袋をあさったりするような奴らじゃありません！！」

「じゃあ、貴方は何なの？」

少女は膝を折り、カラスモドキと同じ目線になった。

癩癩をおこした子供を落ち着かせるように、すすすべの頭を幾度か撫でる。

先程の狸の件で、少女は喋る動物には早くも慣れてしまったらしい。

カラスモドキは踏ん反り返って答えた（突っ張っている腹がさらに突っ張った）。

「僕は、ペンギンです！！」

少女は、その答えにふうんと相槌を打った。
納得している様子ではなかった。

膝に肘を立て、頬に手を当てて言う。

「そうね、確かに貴方はペンギンに見えるわ。でもそんなはずない。全身真っ黒なペンギンなんている訳ないもの。」

「いるんだからしょうがないじゃないですかあ！！」

「貴方はカラスよ、絶対。……まあちよつとだけ太っちゃいるけど、カラスに違いないわ。」

黒い体が赤に染まっているのが分かる。

カラスモドキは一層大きな声で騒ぎ出した。

少女とカラスモドキ、二人分の声がかましく店内に響き渡る。

男はその喧騒をすこし離れた所で見つめ、ため息を付いた。

「お嬢さん、虐めるのはそこら辺にしましてあげたらどうだい。」

男は頭をかきながら、口を挟んだ。

少女は視線だけを男に向け、不服そうに言った。

「貴方も黒いペンギンがいるなんて思っているの？」

「本人がそうだと言っているのだからしょうがないさ。あまり興味もないしね。」

「でも、」

男が肩をすくめた。

「それに、弟より兄の方がもっと珍しい色をしている。」

がたがたと、店の何処からか音がした。

『音がしたぞ！ カーシャ！ カーシャは何処だ！？ また品物を

崩したんだろう、出てこいカーシャ！』

いきなりぱかっとな床板が開いた（ちょうどカラスモドキと少女の間の床だ）。

少女は驚いてそこを退く。

出てこいと言ったわりには、その言葉の主が出て来た。

床からもぞもぞと、何者かが這い上がってくる。

男の後ろに隠れながら、少女はそつとその何者かの姿を確認した。その者は自らがカーシャと呼んだ店員を（少女に言わせればカラスモドキを）思い切り怒鳴り付けていた。

「ごめんなさい兄さん、足元をよく見てなくて……お客さんが見えたら、張り切り過ぎちゃったんだ……。」

カーシャは、涙目で相手に謝罪している。

ペンギンだという言葉が本当なら。

兄弟だという言葉が本当なら。

『ああ、きつとあれは、フツチなんだわ。』

少女はそう思った。

カーシャの横には、雪のように全身真っ白なペンギンがいた。
へらのような翼に、黄色い嘴、突っ張った腹。

おそらく首元にあたる部分に、真っ黒なマフラーを巻いている。

男が真っ白ペンギンに近付いていった。

少女も後に続く。

「ああ、フツチ。」

真っ白ペンギン、フツチは弟を叱ることをやめ、その声に頭を上げた。

フツチの頭にかけている銀縁眼鏡が、きらりと光った。

少女は、フツチを好きになれないと何となく思った。

フツチは、何か企んでそうなとても意地悪な顔をして笑ったからだ。

「やあ、道化。ここに来るとは珍しい。新しいステッキでもご所望かな？」

「今日の客は私じゃない。このお嬢さんさ。」

道化と呼ばれた男は体を少し逸らし、フツチに少女の姿を見せた。
フツチは少女の姿を一瞥し、ぺこりと礼をして『いらっしやいませ』と愛想よく言った。

「……太っちょ白鳥。」

少女は思わずそう呟いた。

フツチはカーシャのように騒いだりはしなかった。

その代わりに、とても愚かで頭が悪い者を見る目付きで少女を見た。

「道化。この——あ——少し頭が足りなさそうなお嬢さんは一体どなただ？」

男が後ろから、少女の両肩に手を置いた。

相変わらず体温のない手だった。

「私の、大切なお客様さ。」

にこやかに答えた男に聞き返す者は、一人ではなかった。

「お客様？」

少女とフツチが、それぞれ男の顔を見上げて言った。

「そう、お客様さ。大事な大事な、ね。」

笑いながら、男は二人に全く同じ答えを返した。

フツチは顎の辺りを撫でながら、じろじろと少女を見つめ上げた。

「ふうむ……。それでは、このお客様は何をご所望で？」

「服が欲しいのさ。」

「ああそりゃ駄目だ！」

フツチが顔の前で翼を振った。

男はかくんと頭を傾け、フツチにその理由を問い返した。

「おや、それは何故だい？ 今日水曜日。衣服を売ってくれる日だろう？」

「確かに曜日は間違ってないさ。だが」

「さっき来たお客様で服は売り切れてしまったんですよ。」

カーシャが口を挟んだ。

「確か夫さんのための新しいワイシャツとかだったかな……ともかく、今日はもう衣服は全て売り切れなんです。」

「ああ、先程入れ違った……困ったな。」

『どうにかならないのかい？』と男は二羽に訊いた。

二羽は無情にも首を振るだけだった。

「カーシャ、フツチ、ちよつとこちらへ。」

男は顎で、部屋の中の太い柱を示した。

その手招きに二羽は従った。

男は少女の肩から手を離す。

柱の影に寄り、二羽相手にひそひそ話をし始めた。

こんな会話が聞こえてきた。

『なあ、頼むよ、私のお客様にいきなり風邪を引かせたくはない。舞踏会用のドレスを注文している訳じゃないだろう？ 君達的能力を持ってしたら、簡単にもう一二着作れるはずだ、違つかい？』

『そんなこと言われましても……。』

『これから新しく作る？ それは無茶だ、道化。また来週にはちゃんと売り出すんだから、文句はないだろう？』

『あのお嬢さんには今すぐ必要なんだよ。見てごらん！ 私の上着を着ただけのあの哀れな姿を。なんとみすばらしく官能的か。あれじゃあ外に出れもしない。可哀相だと思わないかい？』

『しかし——。』

会話はそこで途切れた。

何かごたごたとした音がする。

『しょうがないな、今回だけだぞ。』

フツチが、まるで、今回だけではなかったように慣れた口調で答えていた。

少女の目には、その短い翼にしっかりと数枚のお札が握られているのが見えた。

先程の不機嫌さは何処へやら、少女の元に近付き、フツチはことさら明るい声で言った。

「さあさお嬢さん、こちらへ！ ぴったり似合う服を作るために、寸法をしっかりと計らなければ！」

フツチが背伸びして、少女の手を引いた。

いきなり話しかけられて慌てている少女の様子を無視して、フツチは手をぐいぐいと引っ張り、カーシャは背中を押す。

「この床下に潜って下さい。……そんな心配そうな顔をしなくたって、大丈夫ですよ、貴方が潜れる広さは充分ありますから……さあ、早く！」

少女は舌をもつらせながら、『あ』とか『う』とか返事をして、その穴に足をくぐらせた。

「いつてらっしゃい。」

「いつてきます。」

男がぱたぱたと手を振り、しゃがんで少女を見送る。

少女は消え去りそうな小さな声で答えた。

「さあ、早く早く！ 似合いそうな服を選ぶだけならともかく、一から服を作るんだから大仕事だ！」

フツチとカーシャが少女の頭を押し、完全に穴に潜ったのを確認すると、二羽自身も穴に入ってしまった。

ぱたんと床板が閉じられる。

その音を合図としたように、店の中に静寂が広がった。

男はあぐらをかき、ふうと一息付く。

「……くそ。とうとう降り出した。」

商品の隙間からわずかに覗く窓を、男は憎そうに見つめた。

その透明な表面に、涙のようにぼつりぼつり、雫が一つ、また一つ落ちていた。

雑貨屋（後書き）

新しい登場人物を一回に三人も出して申し訳ありません。
出来はともかく、水曜日に更新できた、やったー、と思ってたら前
話を火曜日に更新していたことに気付く。
バカス。

探寸

「後、どれくらい行けばいいの？」

「もう少しですよ。」

こんな会話も、既に幾度か繰り返していた。

少女は腹ばいになって、必死に腕を動かし続ける。

床下の穴を、まるでもぐらのように這って行った。

穴の中にはランプ一つなく、視力は全く役に立たない。

少女を先頭にして、フツチ、カーシャもそれに続いた。

後ろの二羽は背が低いため、そのまま立って穴の中を歩いていた。

移動に最適な両足を使えないぶん、疲労の溜まり具合は先頭の少女の方が確実に大きい。

額に滲んできた汗を、土にまみれた腕で拭った。

『もつと商品を整理していてくれれば、こんな道を通らずにすんだのに。』

「ん？ 何か言いました？」

後ろから、カーシャの呑気な声が少女の耳に届いた。

「本当に快適な道ねって言ったのよ。」

少女は皮肉をたっぷりこめて答えた。

「お嬢さん、大丈夫ですか？」

「額をかなり固いものに真正面からぶつけたような音がしましたけど。」

「……………」

じんじんと痛む額を両手でかばいながら、少女は涙目になった。

「……ここに来て、痛い目にはっかかり会っているような気がするわ。」

」

少女はまだ痛む額から手を離し、手持ち無沙汰になった両手を前方に伸ばした。

闇の中に進む手は、すぐそこで阻まれた。

冷たい壁の感触がする。

軽く叩いてみると、ぺちぺちという音が穴の中に響いた。

「壁があるわ。これ以上進めない。」

「着いたってことですよ。」

フツチが『当たり前だ』と言わんばかりに答えた。

そのまま少女に後方から指示を出す。

「いつまでも壁の存在を確認していないで、両腕を上げてごらんなさい。」

完全に見下された、偉そうな口調だ。

少女は小さな不満が心に揺らめいたが、どうにか気にせず、言われるままに両腕を上げた。

手の平に、また冷たく硬い感触がした。

「そのまま軽く押してみて下さい。多分壊れてないと思いますから。」

」

がたんと音がして、同時に手がずれた。

穴の中に一抹の光が差し込む。

少女はそのまま腕を上押し続け、膝を立てて天井を開ききった。

真っ白な光が目飛び込んだ。
軽い頭痛がして、思わず両眼を固く閉じる。
真っ赤な瞼の裏が、どくどくと脈打った。

すぐに頭痛が消え、目を開ける。

少女はある部屋の床板から頭を突き出していた。
とても明るい、真っ白な部屋だ。

色とりどりの布地が、絨毯のようにあちらこちらに広がっている。
机の小箱には、色と大きさごとにリボンとボタンがきちんと整理
されており、たくさんのメジャーが、かたつむりのように丸まって
投げ出されていた。

店内のように暑くはない。

少女は大きく深呼吸をした。

澄んだ空気が鼻から勢いよく体に入ってくる。

初めて呼吸出来たような感動があった。

慌てて穴から床へ上がった（穴に入ってきたときと逆の行動だが、
フツチに急かされたという点では全く同じだった）。

部屋の床を裸足で踏む。

冷たい温度が心地良かった。

ずつと匍匐前進を続け、固まってしまった体を伸ばした。

「何でトカゲって、あんな姿勢で生涯過ごせるのかしら。」

後ろを振り返った。

フツチとカーシャが部屋へよじ登って来ている。

フツチは体に付いた土を軽く払い、近くにあるメジャーの中で使
えそうなものを選んでいた。

カーシャが少女の真ん前に立ち、両手を差し出さた。

「上着を失礼。」

少女は自分の体を包んでいる上着を見た。

穴の中で取れたのか、心臓の辺りのボタンが取れていた。確かにこんなぶかぶかの服を着ていれば、正しい寸法は計れまい。少女はボタンを全て外し、上着の袖から腕を抜き取った。

全身の肌を照明の下へ晒す。

ペンギン二羽の前で裸になることについて、何も躊躇いはなかった。

「有り難う御座います。」

カーシャはその上着を受け取り、丁寧に礼をして、部屋の奥に引込んだ。

次に出て来たときは、少女の背丈ほどもあるはしごを担いできた（上着のときもはしごのときも、その重さに何度も転びそうになっていた）。

ふうふう息を切らし、やっと少女の前ではしごを置く。

木で作られた、開閉式のはしごだ。

植木屋がそれに乗って、庭の木を整えている場面が少女の頭に浮かんだ。

フッチがそのてっぺんまでよたよたと昇っていった（危なっかく揺れるそれを、カーシャが下で支えた）。

「ぐずぐずなんかしてられない、さあ始めますよ！」

まずは身長を計った。

フッチが自身の身長よりもずっと長くメジャーを伸ばす。

「はい、背筋をちゃんと伸ばして、猫背は駄目ですよ、踵を上げないように……はい、もう結構です。」

メジャーを伸び縮みさせながら、フッチは寸分の狂いなく少女の体のあらゆる長さを計っていった。

一方カーシャは、嘴で鉛筆をくわえ、器用にその数字を紙に書き

留めていく。

「はい次は股下、次は両腕……。動いちゃ駄目ですよ、サイズが合わない服を購入するほど無駄なことってないでしょう?」

新しい服を買ってもらったとき、大抵の女の子はわくわくとした気分になるものだ。

だが、体を少しでも動かすたびこんな脅し文句が飛んでくるので、少女はかなりうんざりさせられた。

手の甲の長さを計っているとき、壁に貼られた紙が目に残った。太く濃い鉛筆で走り書きをしたのだろう、黒い芯の炭素が何箇所か紙に擦れていた。

『月曜日』

家具・玩具

ビー玉からワイドクロゼットまで（大人の玩具はその他に含むこととする）

『火曜日』

本・音楽

絵本からパイプオルガンまで

『水曜日』

衣服・靴・眼鏡・化粧品

ベビー服から口紅まで

『木曜日』

魚類・両爬虫類・鳥類・哺乳類

メダカから奴隷まで

『金曜日』

医療道具・薬品

ピンセットから疫病予防薬まで（月曜日と同じく大人の玩具用医療道具はその他に含むこととする）

『土曜日』

防犯道具・武器

防犯ブザーからロケットランチャーまで（地雷・核兵器は世界平和のため売り出さないこととする）

『日曜日』

その他

残念ながら、それ以外は題名も何も書かれておらず、文章の意味を示すものはなかった。

だが少女は、二羽に訊かずとも頭にぴんと来た。

あれは、この店の商品納入スケジュールだ。

少女がその紙を指差し、最も気になった箇所を訊いた。

「金曜日の、武器って何？」

「自分を守る物、相手を傷付ける、または殺す道具を売り出す日です。ことですよ。」

『鎖骨の太さ2・59?』と紙に書き終えたカーシャが答えた。

鎖骨の太さが服の採寸にどのような関係があるのか気になったが、少女は会話を続けることを優先した。

「どんな物を売ってるのかしら。」

「あの紙に書いてある通り、核と地雷は売ってません。後はポピュラーにサバイバルナイフとか、マシンガンとか……。あ、今釘バットをお買い上げになると『釘バットを上手にカスタムする方法』相手を早く撲殺するためのに貴方はどうするか?』という本が無料で付いてきますよ、いかがですか?」

「考えておくわ。他には?」

「今人気商品といったら、やっぱりBSG-1銃かなあ……。その型の練習用の物を、一丁300アルでご奉仕させて頂いています。」

一発撃ったらその衝撃で分解してしまっただけという代物なんですけど、皆様には中々ご好評を頂いてますよ。銃、と聞いたらややこしそうで敬遠してしまいがちですけど、銃は刀よりずっと初心者向きなんです。それに……」

「足の平の大きさ、23・74?!」

フツチが大きな声で怒鳴るように告げたので、カーシャは慌てて頭を下げて鉛筆を滑らせた（フツチはカーシャの話の間に七回も少女の足の平の大きさを言っていた）。

少女は笑って、また壁の紙を見た。

「ここつて本当に何でも売っているのね、驚いちゃう。」

カーシャはこの言葉に気をよくしたようだった。

声が先程より格段に高くなりながら、話を続ける。

「お嬢さんに似合う武器って言ったら何だろう……火炎放射器かな？　綺麗な緑の瞳をした少女からお見舞いされる紅の炎！！　最大三メートル四方を一瞬で灰にする、超強力火力！　目盛りを少し調整すれば、手軽に暖が取れますし、焼き芋やゆで卵も一瞬で」

「腹周り、65・21？！！！」

カーシャは、頭を押さえて床にうずくまった。

フツチに、メジャーの金具部分で頭を思い切りぶん殴られたのだ。涙を流している弟を気にも止めず、フツチは口を尖らせて（元々相当尖っている）呟いた。

「全く……皆何故、剣と盾だけで我慢出来ないのか。それだけで、城に閉じ込められた姫様を助けるには充分だというのに！　派手好きが増えて、武器商人としてはちっとも面白くない……全く……。」

頭、胸、尻、滞りなく計り終わっていく。

カーシャが持つ鉛筆もそろそろ削り頃となってきた。

今は鼻の高さを計っていた。

フツチの顔が少女に限りなく近づく。

少女は、林檎の木の下で、今と同じくらい男と顔を近付けたことを思い出した。

少しだけ微笑む。

今、あの男はどうしているのか。

店の商品に囲まれながら、一人寂しく少女の帰りを待っているんだろうか。

だが少女はこれっぽっちも心配していなかった。

あの男は、孤独に慣れている。

そんな雰囲気は何となくした。

本当に何となくだったが、自信はあった。
その自信が何処から来るのか、少女にも分からなかった。

耳元に、北風のように冷たい吐息がかかった。
目を見開き、すぐ近くににいる者に意識を移す。

真っ白いペンギンが笑っていた。
フツチが耳元で囁いたのだ。

「道化とは、どういふご関係で？」

「……道化？」

少女が反応し、わずかに頭を横にした（それと同じくらい早く、
『動かないで！』と注意された）。

「道化つて、一体誰のことかしら。」

「御冗談を。貴方をこの店に連れてきた、あの仮面を付けた男のこ
とですよ。」

少女は、ああ、と殆ど面倒臭そうに相槌を打った。

「あの人と私がどうしたって？」

「仲はよろしいんで？」

「……仲がいいかはどうか分からないけど、多分険悪ではないわ。」

「ABCでいうと、何処までなんですか？」

眼鏡の奥にある、フツチの小さな黒い目が光っている。

年端もいかぬ客をからかうことが楽しくてたまらないという雰囲気
いだ。

少女は口をへ字に曲げて、目を閉じた。

「Dよ。」

「は？」

「あの人との関係はD。Don't know（他人）よ。」

二羽は顔を見合わせる。

しばらくすると、フツチは声を出して笑い始めた。

「成る程。確かにあの男は、人の一人や二人気まぐれで拾ってきそ
うだ。」

「あら、驚かないのね。」

少女は挑発するように睨んだが、フツチは余裕ある笑みを返しただけだった。

「あいつはそういう男なんです。何を考えているか分からない。もしかしたら何も考えてないかもしれないし、世界征服のことを考えているかもしれない。いつも同じ顔をしているんだ、あいつほどポーカーに向いている奴はいませんよ。……さあデータは揃った!」

最後に瞳の大きさを計り、フツチははしごから飛び降りた。

「貴方には白が似合うと思いますよ、レディ。」

*

「あの子を一体どうするつもりだ?」

上から降ってきた声に、男、もとい道化はカップを傾ける手を止めた。

道化はフツチ達が去った場所から動くことなく、数時間待ち続けた。

外の雨はやむどころか、どんどん強くなってきた。

冷たい雫がガラスにぶつかり、弾け、轍のように流れていった。

「どうするって、どうということだい?」

がたがたと震える窓に寄り掛かって、道化は答える。

窓から外の雨を見つめるのも飽きてしまった。

まだ少女が穴から這い出て来る様子はない。

道化はこの店の商品の、ポット、ティーカップを勝手に拝借して、優雅に紅茶に舌鼓を打っていた。

手に持ったカップを揺らすと、その小さな空間で赤い波が生まれた。

「ふむ、やはり紅茶専門店よりこの店の葉のほうが風味がいい。」

道化はまた一口喉を鳴らし、満足げに笑った。

ふと何かを思い出したように、シルクハットに言う。

「ああそういえば、彼女を肩車していたときの君の言葉。形が歪むほど強くしがみつかれたからといっても、女性に対して『貧乳!』はないだろう。幸い彼女に君の言葉は聞こえないみたいだけれど、あれには苦笑いするしかなかったよ。」

「こっちは窒息するところだったんだ!!」

「呼吸なんてしていないのにかい。」

「そんなことはどうでもいい!」

シルクハットは早々とこの話題を打ち切った。

「あの子とこれからどう接するつもりだと言っている。」

シルクハットの発言が、額を細かく震えさせる。

真面目な口調で問われたことに対して、道化はくすくすと笑った。一方通行でしか物を考えることが出来ないシルクハットを、嘲笑っているようだった。

「こちらからはどうもしない。あちらにどうかしてもらうまでさ。」

「愛してもらおう、とでも?」

「他にどんな目的があって彼女をここに連れてきたと思う?」

窓を打ち付ける水の銃弾は、さらに激しくなってきた。

空になったカップに、また紅茶を注ぐ。

丸い器から、とろりとした甘い香りと共に、暖かい湯気が立ち昇った。

シルクハットは鼻を鳴らすように震えた。

「そう上手くいくかな。」

「うん？」

「あの少女は一度死を味わっている。肝は座っているぞ。」

「何が言いたい。」

「いきなり『私を愛して下さい』と告げて、『はい分かりました』なんて答えてくれるかな、ということさ。」

「……………」

道化は手に持つカップを見た。

道化は今日から、緑が好きになっていた。

だが描かれているのは真っ白な百合畑だった。

主張しすぎない白が好きだったはずなのに、百合の花弁を見つめても、何の感情もおこらなかった。

「ふむ、それもそうだ。」

一滴だけ、カップのふちにしがみついていた、茶の雫が、底へと落ちていった。

*

「はい、腕を上げて……………そこらを歩いてみて……………手を腰にあてて、胸を張ってみて……………はい、くるとターン。」

少女はフツチの言葉に従うままに動いた。

新たな服を纏った少女を、二羽は目を離すことなく観察した。

その後、深く頷く。

言葉にはしていないが、心の中で『いい仕事をした』とでも言っているのは明らかだ。

「完璧だ。腕が引つ張られたときの袖口の動き具合も、ハイヒールの音の高さ具合も、女の身体的特徴の主張具合も、回転したときのスカートの広がり具合も、完璧完璧、全て完璧。」

二羽が運んできた大きな移動式鏡が、少女の全身を映している。

少女は、目の前の存在する、もう一人の自分を見つめた。

鏡の中の女の子は、柔らかそうな四角襟の白いワンピースを着ていた。

黒く、踵が高いハイヒールのせいで、少しぎこちなく立つ。

少女がスカートをつまむと、鏡の中の少女もスカートをつまんだ。

「お似合いですよ。」

カーシャがはしごに登り、少女の髪をくしでといていた。

「いやまったく、作った服をここまで似合わせてくれると、店員も嬉しいってもんだ。いや違う、私達が似合うように作ったのか……。」

フツチが、眼鏡を拭きながら自画自賛した。

その途中に、何か思い出したのか部屋の奥に下がった。

「そうだそうだ、これを忘れていた。」

フツチの真っ白な両手に乗せられて、真っ黒な上着が運ばれてきた。

「ボタンが一つ取れていましたからね、直しておきましたよ。お嬢さんがたくさん買ってくれたから、サービスします。」

「あら、有り難う。」

少女は膝を折り、小さな店員からそれを受け取った。

もともとあった皺や、土の汚れが綺麗さっぱりなくなっている。

胸の金色のボタンが、光に反射して輝いていた。

ちゃんとサイズが合っている服を着た今では、改めてその上着の

大きさに驚いた。

フツチやカーシャではなくとも、思わず落としてしまいそうなほど、それは大きい。

短い間ではあったが、よくこんな大きな服を着て過ごせたものだ。少女は苦笑し、軽くそれを抱きしめ、目を閉じた。

——動物は、危険を感じたら睡眠中でもすぐに覚醒し、逃亡、または攻撃の体制に移らねばならない。

その覚醒の早さといったら、端から見えていたら驚かすにはいられない。

そんな野生の動物達を彷彿とさせるように、少女は瞬時に瞳を開けた。

抱きしめていた上着を目の前に広げ、まじまじと見つめる。

「……………」

何か思い出したように、顎に手を当ててまばたきをした。

「どうかなさいましたか？」

はしごから降りたカーシャが、心配そうに少女に声をかける。

「いいえ、何も。」

少女は広げてしまった上着を丁寧にたたみながら、返事をした。

その顔には、まるで道化そっくりの、冷たい笑みが浮かんでいた。

探寸（後書き）

匍匐前進ほふくぜんしんがこんなに難しい字だとは知りませんでした。

ヒロインは貧乳です。

これだけは譲れない。

乳といえば、『保健室の死神』コミックスを買ってみたら、乳首修正がされていました。
ヒヤッホイ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0261j/>

恋するピエロ

2011年1月9日09時47分発行